Ⅰ　研究主題

意欲的に学び、確かな学力を身に付けた生徒の育成

～　重点支援校訪問を生かした学力向上の取組を通して　～

Ⅱ　主題設定の理由

【　次期学習指導要領が目指す学校教育　】

これまでの我が国の学校教育の実践や蓄積を活かし、子ども達が未来を切り拓くための資質・能力の育成を目指して、新学習指導要領が作成された。小学校では平成 32 年度、中学校では平成 33 年度に完全実施となる。急激に変化する社会の中で、学校教育における課題は多様化・複雑化しており、学力の低下と格差の拡大、貧困問題、学校の小規模化、指導技術の伝承など、緊急な対応が求められている。学指導要領改訂の方向性として、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」が重視され、「社会に開かれた教育課程」、「カリキュラム・マネジメント」、そして、「主体的・対話的で深い学び」を実践することが必要とされている。また、新しい時代に必要となる資質・能力として、「学びに向かう力・人間性」「生きて働く知識・技能」「思考力・判断力・表現力」の三つが挙げられている。

新しい時代に必要となる資質・能力とは、これまでの学校教育の中で目指してきた「確かな学力」と重なる部分が多い。確かな学力の三要素とは、「知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力等の育成」「学習意欲の養成」であり、文科省もこれまでの学校教育の実践や蓄積を生かすようにと示唆を与えている。つまりこれからの学校教育では、一方的に知識を得るだけでなく、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善をさらに充実させ、社会で生きていくための資質・能力を身に付け、生涯にわたって学び続けることを目指している。そのため、討論など課題に対して意見を出し合い、解決方法を探る授業をはじめ、各教科で学んだことを、問題を解く為だけでなく、いかに実生活に結び付け、生かしていける力を養うかが課題となっているのである。

【　諸テストの分析による本校の生徒の実態　】

本校では、「親愛　英知　鍛錬」を教育目標に掲げ、その具現化を目指して、平成２８年度から喫緊の課題である学力向上に焦点を当て、授業研究班、学習環境研究班を中心に「確かな学力」を身に付けた生徒の育成に取り組んできた。本校の生徒はおおむね素直で親しみやすく、落ち着いた態度で学校生活を送っている。また、「リーダーシップ・メンバーシップ」を合言葉に、生徒会活動や学校行事、部活動を通して、協力し合う態度を身に付けた生徒が多い。また、昨年度実施した「学習アンケート」によると、全国や宮崎県の中学生と比較して、家庭学習の取組や授業への姿勢は決して劣っていなかった。しかし、諸テストの結果を分析すると、全国や宮崎県の平均点に達していない教科もあり、思考力・判断力・表現力を問う問題（いわゆるＢ問題）を苦手としている生徒が多かった。

諸テストの結果を分布と経年変化の視点で見てみると、二つの課題が浮き彫りとなった。まず、分布の視点から学力上位層と下位層が大きく二極化しており、下位層の生徒は学習意欲も欠如していた。経年変化の視点では、小学校の時から国語・算数の力はほぼ全国平均であるが、社会・理科では、問題文からしっかりした考察をすることに課題が見られた。英語においても、同様の傾向が見られる。また、将来の目標意識が希薄な生徒が多く、一斉授業だけでは理解することに時間がかかり、特別な支援が必要な生徒が各クラスに数名程度いることも課題である。そのため、習得した知識や技能の活用を目指すような発展的な授業実践が困難であり、個別の支援や習熟の時間を確保する必要がある。

【　本年度の研究の方向性　】

このような状況を踏まえて、昨年度は学力向上の取組２年目として、具体的な生徒の実態把握、家庭学習を含めた学習環境の整備、そして、「主体的・対話的で深い学び」と基礎・基本の定着を目指した授業実践を中心に研究を進め、特に、３回の研究授業をグループ（学年・教科）ごとに行い、お互いの教科の良さをそれぞれの授業で活用できたことは大きな成果であった。今年度、本校は重点支援校訪問の指定１年目となる。学校政策課、県教育研修センター、中部教育事務所、高鍋町教育委員会で支援チームを作り、本校の教育的課題解決のため授業力向上（学力向上）に向けた取組を行っていく。今回の重点支援の目的は「形式」よりも「内容・結果」を重視し、学校の実態を踏まえた一

貫性のある支援により、学校及び教員のＯＪＴの推進を図ることである。授業における私達教師一人一人の悩みや課題の解決、そして、生徒のための授業力向上に有効な手立てとなることが期待されている。また、高鍋町教育研究所においては学力向上の研究を行っており、できる・わかるを大切にする授業づくりを目標に、家庭学習のリーフレットして「目指す高鍋っ子の姿」、授業モデルとして「高鍋の授業スタンダード」を作成した。特に、「高鍋の授業スタンダード」では、導入における見通し、展開におけるできる学力（基礎・基本）とわかる学力（思考・判断・表現）の定着、終末における習熟（学習内容の定着）といった一般的な授業パターンを示した。研究所の研究内容は具体的に活用できるものが多く、本校の研究内容ともリンクしている。

そこで、今年度の研究の方向性を次のように定めた。研修センターの「みやざきWeb 学びのシステム」を活用し、学力の状況を具体的に把握する。学習環境の整備や授業実践など、これまでの研究内容を引き継ぎ、高鍋町教育研究所の研究も活用する。最終的に年３回行われる重点支援訪問を生かした組織的な取組を行い、教師一人一人が学力向上に向けた授業力向上に取り組んでいく。このような取組を通して生徒の学習意欲を喚起し、生徒一人一人に確かな学力を身に付けさせることを目標としている。教師一人一人の授業力向上、そして、生徒のためになる研究を進めていきたい。

Ⅲ　研究の仮説

学力向上のため生徒の実態を把握し、組織的に授業力向上に取り組み、学習環境を整備することで、意欲的に学び、確かな学力を身に付けることができる生徒が育つであろう。

Ⅳ　研究の内容

１　生徒の学力の実態把握

(1)　研究の目標

諸テストの結果を分布と経年変化の視点で分析し、本校の課題を把握し、どのような手立てが有効かを研究する。

(2)　研究内容

○　生徒の実態調査、諸テストの結果分析
○　研修センターの「Web 学びのシステム」の活用

２　「授業における４つのチェックポイント」を意識した授業力向上

(1)　研究の目標

「授業における４つのチェックポイント」を意識し、個人やグループごとの設定目標に向けた授業力向上について研究する。

(2)　研究内容

○　各教科の良さや「授業における４つのチェックポイント」を生かした授業力向上
○　「高鍋町の授業スタンダード」を生かした授業づくり
○　重点支援校訪問におけるフィードバックを生かした授業づくり
○　組織的な相互参観授業
○　ICT の活用等の研究

３　学習環境の整備

(1)　研究の目標

学力向上への生徒及び保護者の意識を高め、基本的な生活習慣を含めた学習環境の在り方について研究する。

(2)　研究内容

○　家庭学習の在り方（保護者、生徒への啓発）
○　学習意欲を喚起する掲示物、習熟の時間の取組
○　学習委員会による学習態度向上の取組